

図書紹介

ふたつの

憲法を生きる

教育学者が

次世代と語る戦後

花伝社 二〇一六年 一五〇〇円

牧 征名 著

最近知らされた広島・府中市の中学生の悲惨な自殺は、学校とは、教育権とは、を根源的に問うものです。

本書は、それに応えるとともに「明文改憲」が現実化している今日、多数の人、とりわけ若い人にも是非とも読んで欲しい本です。

牧さんは、敗戦直後に父を亡くし、母子家庭の一人っ子になり、旧制高校卒業後、中学校教員や夜間定時制高校教員として働きながら東京大学で学び、東大で長く研究

と教育にあたられました。

町工場や商店に勤め夜学に来る子どもとの共鳴が、「学ぶことと働くことの統合」という考えを生みます。その事情は、『教育権』（新日本新書、一九七一年）に詳しいが、その原点を大切にしつつ、いじめ・不登校などの新しい教育の状況に向き合い「教育権から子どもの権利へ」と探究されます。

その辺は、「牧弟子」と自認する世取山洋介さん（新潟大学准教授）が、解題で明らかにします。

「牧征名先生の学問的な仕事はすでに『牧征名教育学者著作集』（全一〇巻、一九九八年、エムティ出版）としてまとめられ、「この『著作集』が牧先生の学問的業績の全体像を示しているのに対し、牧先生のインタビュアーを収める本書は、牧先生の学問的な仕事の基礎にあつて牧先生の研究を引っ張ってきた『心持ち』を時代の節目を追って披露するものとなっている」。

教育学者の荒井文昭さん（一九五九年〜）とライターの本木絹さん（一九六四年〜）が、牧さん（一九二九年〜）にインタビュースる、というスタイルで読み易く、親切です。

例えば、「これはマルクス（哲学者、思想家、経済学者、革命家、一八一八—一八八三）が『ゴータ綱領批判』（一八七五年、『マルクスIIエンゲルス全集』第一九巻、大月書店ほかに所収）の中で」のように。

次の四章から成っています。第一章 敗戦前後の私——戦争責任への考察 第二章 戦争と知識人 第三章 新しい憲法の下で——学ぶことと働くことの統合 第四章 教育とは儂い方がいい

ふたつの憲法を生きている知識人のライフストーリーから、過去に学び、憲法、平和など今日的課題に迫り得る書物です。

（吉田武雄・所員）